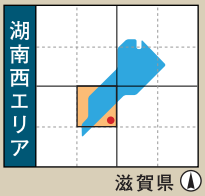
史跡
国指定

大岩山古墳群（おおいわやまこふんぐん）

野洲町小篠原他　昭和16年12月13日指定



大岩山古墳群は、日本最大の銅鐸を含む、24口もの銅鐸が出土したことで知られる、野洲町大岩山の丘陵部から西側の平野に立地します。出現期から、末期までの大型古墳により構成される古墳群で、比較的狭い範囲で、首長の系譜を追うことのできる事例として注目されています。

当時のできごと	
3世紀末～	近畿地方・瀬戸内地方に古墳が出現する
4世紀末～	古墳の巨大化が進み、分布域も著しく拡大する
5世紀末～	古墳の巨大化がおさまり、群集墳が出現する

大岩山古墳群について

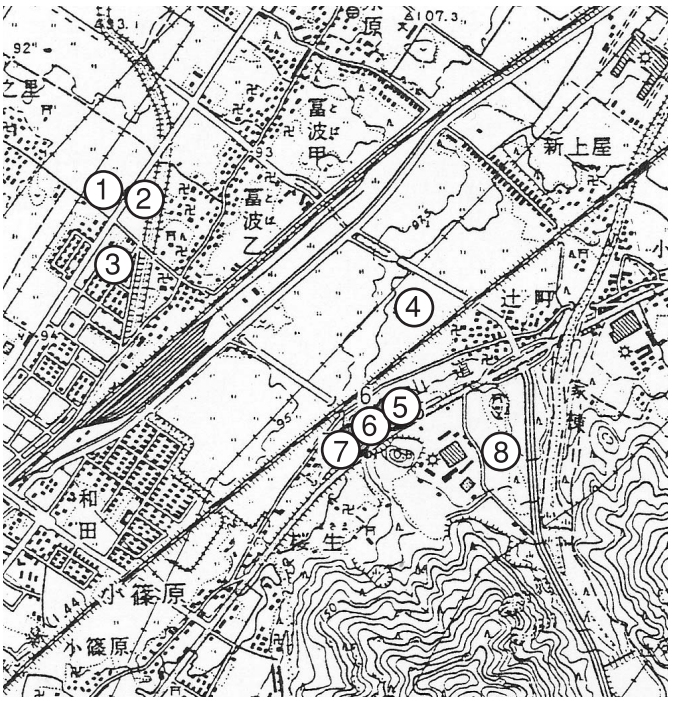
大岩山古墳群は、もとは20基以上の古墳から構成される古墳群でしたが、その多くが失われ、現在残る8基の古墳が史跡に指定されています。古墳群を構成する古墳には、弥生時代から古墳時代にかけて造られた最古級のものから、古墳時代終末期のものまで含まれていることから、この地域は、著名な大岩山銅鐸の埋納者から、連綿と首長の系譜を追うことのできる、まれな地域となっています。一方、古墳の形状は、前方後方墳、前方後円墳、帆立貝形古墳、円墳と多様であり、この古墳群を造営した首長の政治的な背景が、時代と共に変化していったことをうかがわせます。



桜生地区から冨波古墳方面を見る

大岩山古墳群を構成する古墳

大岩山古墳群を構成する古墳の中には、近年の開発により消滅してしまったものもありますが、もとは20基以上の古墳があったと考えられます。また、本格的な調査の行われていないものもあることから、その年代についても、今後の検討を要するものも含まれ、さらに、古墳群としてとらえる範囲についても、今後検討を加える必要があります。現段階での調査成果に基づき主な古墳を古い順から列記すると、3～4世紀の冨波古墳①、3世紀後半の古冨波山古墳③、4世紀前半の大岩山第二番山林古墳（銅鏡が出土。開発により消滅）、4世紀後半の大岩山古墳（銅鏡が出土。開発により消滅）、5世紀中頃の大塚山古墳④、5世紀後半の林ノ腰古墳（2重の周濠のある前方後円墳で、墳丘長約90m、周濠を含めると150mの県下最大級の古墳。開発により大部分が消滅）、5世紀末の亀塚古墳②、5～6世紀の天王山古墳⑦、6世紀前半の円山古墳⑥・甲山古墳⑤、7世紀代の宮山2号墳⑧と続きます。
［数字は下図の指定された古墳の位置に一致］



大岩山古墳群　分布図



甲山古墳　羨道部の解体工事の状況

甲山古墳（かぶとやま）

大岩山から北西に延びる丘陵の先端付近に築造された、横穴式石室を主体部とする円墳です。この地域は桜生（さくらばさま）と呼ばれる場所で、近接して、天王山古墳、円山古墳が立地します。墳丘の直径は30m以上、周囲の水田と墳頂部の比高差が20m程もある、名前のとおり「甲（かぶと）」を伏せたような形をしています。主体部は、墳丘の中心に造られた、全長が14.2mにおよぶ大型の横穴式石室で、羨道の天井は、一石ごとに階段状に低くなっています。玄室の規模は、長さ6.8m、幅2.8m、高さは3.3mもあり、床面には玉石が敷き詰められていました。玄室の中央には、中が真っ赤に着色された長さ2.6m、最大幅1.6m、高さ約1.8mの大きさの刳り抜き式の家形石棺が納められていました。この赤い顔料の成分は、水銀朱と、ベンガラ（酸化鉄）の両方が用いられていることがわかっています。この石棺の石材は、熊本県宇土半島産阿蘇溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）であることもわかりました。巨大な石の塊を陸路、海路を使い人力で運ぶことができた、この古墳の被葬者の力の大きさをうかがい知ることができます。被葬者の実像については、調査で出土した遺物からも推測することができます。石室は盗掘を受けており、副葬品のほとんどは持ち去られていましたが、ガラス玉を始めとする多量の玉類、桂甲小札（けいこうこざね：鎧の部品）や鉄鏃、太刀などの武器類、馬甲（ばこう：馬に着せる鎧）の部品・轡（くつわ）などの馬具類、金糸、鉤状鉄器など多くの遺物が見つかっています。このうち、馬甲や金糸は全国的にも出土事例の少ない遺物です。また、鉤状鉄器は奈良県の藤ノ木古墳などの例から、石室内を荘厳する布を吊した金具と考えられます。盗掘を受けてもなおかつ、このような豪華な副葬品が見つかっており、この被葬者が大変に大きな力を持った人物であることがわかります。



甲山古墳出土の玉類



円山古墳の石室の状況



円山古墳出土鉄鏃の束

円山古墳（まるやま）

この古墳も桜生地区にあり、築造年代は甲山古墳よりやや新しい時期と考えられています。昭和57年に実施した測量調査からの知見では、墳丘の北東側に幅約15m、長さ約10mの方形に近い造出し状の突起が見られることから、帆立貝形の古墳と考えられていました。しかし、近年行った発掘調査では、この部分が、造出し部とは考えがたい状況が見つかったことから、直径が約28m、高さが約8mの円墳とすることが適当と考えられます。

主体部は、甲山古墳と同様な構造の横穴式石室で、玄室の長さ約4.3m、奥壁幅約2.4m、高さ約3.1mの規模があり、床面には玉石が敷き詰められていました。玄室の手前寄りには、長さが2.83m、最大幅1.47m、高さ1.83mの、これも甲山古墳と同じ、熊本県宇土半島産阿蘇溶結凝灰岩で造られた、内外面を真っ赤に塗った刳抜き式の家形石棺が納められていました。また、この石棺の背面には、奈良、大阪の県境にそびえる二上山の凝灰岩で造られた、組合わせ式の石棺が安置されていました。この古墳には、最低でも二人の人物が葬られていたことになります。この古墳も盗掘を受けていましたが、石室の中からは、1万点にもおよぶガラス玉を始め、多量の鉄製の武器類、さらには、冠の立飾や耳飾などの装身具、銀製の飾金具など、通常の古墳からは出土しないような遺物が出土しており、この古墳の被葬者が、甲山古墳の被葬者と同様、大きな力を持った人物であることがうかがえます。



冨波古墳全景

冨波古墳（とば）

大岩山古墳群の中で最も古い時期に造られた古墳です。墳丘部分は削平され、残っていませんが、全長が約42m、周濠を含めると52m程の前方後方墳です。前方部はほぼ直線的に開き、長さ約20m、幅約19m。後方部は正方形に近く、長さ約22m、幅約21mの規模があります。埴輪や葺石は見つかっていません。主体部は削平され全く残ってはいませんが、くびれ部の周濠の底から、近江地域独特の特徴を持つ古墳時代初頭の土器が、周濠の別の部分からは、東海地方の特徴のある朱の塗られた土器類が出土しています。

冨波古墳は、大岩山古墳群のうち最も古い時期に位置づけられていますが、主体部が残っていないことから、その築造の時期を確定するにはいたっていません。しかし、いずれにしても弥生時代から古墳時代にかけての、周溝墓（しゅうこうぼ：埋葬主体部の周りに四角や前方後方形の溝を巡らした墓）から古墳への変遷を考える上で重要な意味を持つ古墳です。



大塚山古墳全景



大塚山古墳出土鶏形埴輪

大塚山古墳（おおつかやま）

大塚山古墳は桜生地区の北西、家棟（やのむね）川によって形成された扇状地上に立地しています。直径が約57mの円墳で、北側に幅が約33m、長さが約8mの造出しが付きます。大塚山古墳から見つかった造出しは通常のものとは異なり、墳丘側に入った楔（くさび）状の食い込みにより、東西比率2：1に分割されています。また、造出しの規模が大きく、帆立貝式の古墳と見ることができます。全面的な調査を行っていないため、正確には不明ですが、これまで調査を行った部分からは葺石が確認されており、もとは、墳丘の全面に葺石が配されていたものと考えられます。

造出しの部分からは多量の埴輪が出土しています。埴輪の一部は据えられた状態で見つかったことから、この古墳における埴輪の使い方や、当時の人が行動した面を復元することができました。円筒埴輪の他に、家形、蓋（きぬがさ）形、鶏型、水鳥形、盾形、甲冑形、鞆形などの形象埴輪も見つかっています。特に鶏型埴輪は、全長約80㎝、幅約37㎝、高さ約80㎝に復元される大型品で、外面に赤い顔料が塗られていたようです。

また、埴輪の他に石見型盾形木製品（いわみがたたてがたもくせいひん）と呼ばれる、類例の少ない木の埴輪も出土しています。

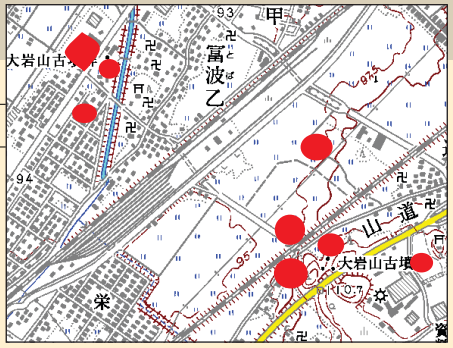
関連する文化財

大岩山銅鐸出土地（野洲町）	大岩山古墳群の背面から明治14年、昭和37年の2回にわたり24口の銅鐸が出土。質的には日本最高の出土量となっている
鴨稲荷山古墳（高島町）	学習シートNo.073
伊勢遺跡（守山市）	弥生時代後期のクニの一つ。大型の神殿建物が円形に並ぶ特異な姿が注目されている

もっと深く知りたい

野洲町立銅鐸博物館	☎077-587-4410　野洲郡野洲町辻町57-1
安土城考古博物館	☎0748-46-2424　蒲生郡安土町下豊浦6678

大岩山古墳群へのアクセス　JR琵琶湖線　野洲駅下車



【参考文献】〔図説日本の史跡〕同朋舎　〔近江の遺跡〕（財）滋賀県文化財保護協会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月